

PICK UP MOVIE

『ドマーニ！愛のことづて』

[2023年/イタリア/アメリカンヒスタ/118分] G

監督：パオラ・コルテッレージ

©2023 WILDSIDE S.r.l – VISION DISTRIBUTION S.p.A

★2024年ダヴィッド・ディ・ドナテロ賞

主演女優賞/助演女優賞/新人監督賞/脚本賞 主要4部門受賞

★第18回ローマ国際映画祭 オープニング作品

自由を勝ち取るために
何をしたか？

4/11~



1946年、イタリア・ローマで物語が始まる。

敗戦後の荒れた世相の中で、主人公デアアの夫は、容赦なくデアアに暴力を振るう。二度も戦争に行ったせいだというが、辛い目に遭ったのは男だけではない。暴力は男たちの伝統であるかに見える。

一方妻のデアアにとっても、このひどい状況がどうやら当たり前になっているらしい。起き抜けに理由もなく夫にひっぱたかれても、表情も変えず食事の準備をし、いたずら盛りの息子や義父の世話をし、そのうえ種々の賃稼ぎの仕事に出かけていく。逃げ場はないから日々の生活を続けるしかない。デアアを演じているのは、これが初監督作品で、脚本も担当した喜劇俳優のパオラ・コルテッレージだ。重いテーマをやさしくテンポよく語る。なかでも抽象化した表現で抑圧や抵抗を描き、絶望的な状況を希望へとつなげる演出は見事だ。

家事、育児、賃仕事といつも急ぎ足で街を通り過ぎていくデアアにも、小さな慰めがある。彼女にずっと思いを寄せている自動車修理工のニーノとお喋り、それに街の治安維持に従事している米占領軍の兵士ウィリアムだ。彼は言葉は通じないものの、生傷の絶えないデアアに同情を寄せている。

娘にはよりよい人生をと願い、デアアは精一杯の頑張りで娘の婚約までこぎつけた。ところがどうやら、娘も自分と似た人生に歩み入ろうとしている。それに気づいたデアアは、いったい何をしたか？

そんなある日、デアアは珍しく自分あての郵便物を受け取る。その手紙を時折取り出しては眺めるデアアは、何か行動を起こそうとしているようだ。青果店を営む親友のマリーザにも秘密を打ち明けて協力を頼む。マリーザは、逃げるなら逃げ切れないと殺されるよ、と釘を刺す。友人たちもデアアの苦境を知りながら、何もできずにいたのだ。

さて、決行の日。なんとと思わぬアクシデントでデアアは家を出られない。このままだと、また同じ日常に引き戻されてしまうではないか。ハラハラドキドキの果てに、デアアはいったいどこへ向かったのか？ 果して、ひるまずに昂然と男に対峙できる日は訪れるのか？

現在の有様を目で見ながら、過去の出来事を耳から聞く。人間の愚かさには心は揺らぎ、けれど今いる人間の風情にも心惹かれる。監督はこれだけの濃密な現在の世相を、そして占領時代を生きた人のたくさんの物語を繰り広げて、何を語ろうとしたのだろうか。計算しつくされた構成で現れる画面を追い、その場所の来歴を聞くうちに、観る者は深い思考へと導かれる。稀に見る大作だと思う。

プロフィール

田村志津枝

ノンフィクション作家。一方で大学時代から自主上映や映画制作などに関わってきた。1977年にファスピンダーやヴェンダースなどのニュー・ジャーマン・シネマを日本に初めて輸入、上映。1983年からホウシャオジエンやエドワード・ヤンなどの台湾ニューシネマ作品を日本に紹介し、その後の普及への道を開いた。